吉蔵教学と真諦三蔵

奥野　光賢*
（日本 駒澤大学）

一

「東アジアにおける仏性・如来蔵思想の受容と展開」を総合テーマとした、昨年の第1回韓・中・日国際仏教学術大会において、小菅陽子氏[(1)]や中西久味氏[(2)]の近時の研究を受けて、「吉蔵の文献に現れた一乗と仏性との関係――一乗仏性説を中心として――」を発表された韓国金剛大学校の崔恩英教授は、中道仏性が三論学の伝統的な仏性説であることを再確認しつつも、「一乗仏性」こそが吉蔵（549-623）の独創的な仏性説であると主張された[(3)]。教授の提言は、今後の吉蔵研究にとって貴重なものであったといえよう。

ところで、いまからちょうど十年ほど前、筆者も三氏がそれぞれ扱われたのとほぼ同様の資料を用いて、「吉蔵の仏性思想」を論じたことがある[(4)]。そこで今回は三氏の研究に触発されて、改めて旧稿を見直してみたいと思った次第である。三氏の研究の中、小菅氏と中西氏の論考は真諦三蔵（499-569）を中心としたものであるところから[(5)]、本稿はその驥尾に付して「吉蔵教学と真諦三蔵」と題することとした。なお、この分野に関する先行研究としては、務台孝尚氏の論文[(6)]があることをまず最初に指摘しておきたい。

二

本稿において、筆者は旧稿を振り返りながら、

〔1〕 吉蔵における仏性理解が真諦訳『仏性論』に基づいていること。

〔2〕 同論に基づいて吉蔵が「一闡提成仏説」を認めていたこと。

---

*駒澤大学仏教学部教授。

〔3〕 吉蔵が真諦訳『摂大乗論釈』の所説を受けて「転根」の義を認めていたこと。

の３点を再確認したい。

〔1〕

『勝鬘宝窟』巻下之本「第二釈名門」には、真諦訳『仏性論』(7) に依拠して、次のように述べられる箇所がある (8)。

A. 『勝鬘宝窟』巻下之本「第二釈名門」

第二釈名門者。言如来者。体如而来。故名如来。**依仏性論**。蔵有三種。一所摂蔵。二隠覆蔵。三能摂蔵。所摂蔵者。約自性住仏性。説一切衆生無有出如如境者。並為如如之所摂。故名蔵也。則衆生為如来所蔵也。隠覆蔵者。如来性住在道前。為煩悩隠覆。衆生不見。故名為蔵。前是如来蔵衆生。後是衆生蔵如来也。能摂蔵者。謂果地一切過恒沙功徳。住応得性時。摂之以尽。故能摂為蔵也。第一句以実摂妄。第二句以妄摂実。第三句以実摂実。

問。既得以実摂実。亦得以妄摂妄不。

答。亦有。以一切煩悩並摂在五住之中。前文云断一切煩悩蔵也。

又此文中。出生如来。是故亦名如来蔵。雖有諸義。今此文中如来在隠不現也。故名如来蔵。三**蔵云**。亦言如来胎。如来蔵在煩悩之中。名如来蔵。如来蔵即是仏性。仏性有三。一自性住仏性。二引出仏性。三至得仏性。引出仏性。従初発意至金剛心。此中仏性名為引出。引出者。凡出五住。一出闡提。二出外道。三出声聞。四出縁覚。五出菩薩無明住地位。諸仏三身。即是至得仏性。以前二為本。**此語出仏性論**。（大正蔵 37.67b-c）

すなわち、記述冒頭で吉蔵は「蔵には三種が有る」と述べて、『仏性論』巻第 2「如来蔵品第三」に依って議論を進め、記述後半ではさらに「仏性に三有り」として、これも『仏性論』に依って自説としていることが理解される。ここで吉蔵が依用した『仏性論』の原文を順次示せば、次のようである。

①『仏性論』巻第 2「如来蔵品第三」

復次如来蔵義有三種応知。何者為三。一所摂蔵。二隠覆蔵。三能摂蔵。一所摂名蔵者。仏説約住自性如如。一切衆生是如来蔵。言如者。有二

義。一如如智。二如如境。並不倒故名如如。言来者。約従自性来。来至至得。是名如来。故如来性雖因名。応得果名。至得其体不二。但由清濁有異。在因時為違二空故起無明。而為煩悩所雑故名染濁。雖未即顕。必当可現故名応得。若至果時。与二空合。無復惑累。煩悩不染。説名為清。果已顕現故名至得。譬如水性。体非清濁。但由穢不穢故。有清濁名。若泥滓濁乱故不澄清。雖不澄清。而水清性不失。若方便澄渟。即得清浄。故知浄不浄名。由有穢無穢故得。非関水性自有浄穢。応得至是二種仏性亦復如是。同一真如。無有異体。但違空理故起惑著。煩悩染乱故名為濁。若不違二空。与如一相。則不起無明。煩惑不染。所以仮号為清。所言蔵者。一切衆生悉在如来智内故名為蔵。以如如智称如如境故。一切衆生決無有出。如如境者。並為如来之所摂持故名所蔵。衆生為如来蔵。復次蔵有三種。一顕正境無比。離如如境。無別一境出此境故。二顕正行無比。離此智外。無別勝智過此智故。三為現正果無比。無別一果過此果故。故曰無比。由此果能摂蔵一切衆生故。説衆生為如来蔵。二隠覆為蔵者。如来自隠不現。故名為蔵。言如来者。有二義。一者現如不顛倒義。由妄想故。名為顛倒。不妄想故。名之為如。二者現常住義。此如性従住自性性来至至得。如体不変異故是常義。如来性住道前時。為煩悩隠覆。衆生不見故名為蔵。三能摂為蔵者。謂果地一切過恒沙数功徳。住如来応得性時。摂之已尽故。若至果時方言得性者。此性便是無常。何以故。非始得故。故知本有。是故言常。（大正蔵31.795c-796a）

②『仏性論』巻第2「三因品第一」

復次仏性体有三種。三性所摂義応知。三種者。所謂三因三種仏性。三因者。一応得因。二加行因。三円満因。**応得因者**。二空所現真如。由此空故。応得菩提心。及加行等。乃至道後法身。故称応得。**加行因者**。謂菩提心。由此心故。能得三十七品。十地十波羅蜜。助道之法。乃至道後法身。是名加行因。**円満因者**。即是加行。由加行故。得因円満。及果円満。因円満者。謂福慧行。果円満者。謂智断恩徳。此三因前一則以無為如理為体。後二則以有為願行為体。三種仏性者。応得因中具有三性。一住自性性。二引出性。三至得性。記曰。住自性者。謂道前凡夫位。引出性者。従発心以上。窮有学聖位。至得性者。無学聖位。（同前・794a）

③『仏性論』巻第4「無変異品第九」

後五譬仏性者。仏性有二種。一者住自性性。二者引出性。諸仏三身。因此二性故得成就。為顕住自性故。説地中宝蔵譬。此住自性仏性者。有六種徳故如宝蔵。一者最難得。仏性亦爾。於無数時節。起正勤心。因福徳智慧満足荘厳。方始顕現故。譬如意宝蔵。由勝因乃感。二者清浄無垢。由仏性与煩悩不相染故。是故譬如意宝。不為不浄所汚。三者威神無窮。明六神通等功徳円満故。如意宝亦爾。随意能辨故説宝蔵譬。四者能荘厳一切世間功徳善根。於一切処相称可故。如意宝亦爾。能為世間種種荘厳具。五者最勝。於一切法中無与慧与等故。亦如如意宝。物中最勝故。説宝蔵為譬。六者八種世法中無有変異。為十種常住因故。真宝亦爾。雖焼打磨不能改其自性故。取宝蔵以譬住自性仏性。二者引出仏性。従初発意。至金剛心。此中仏性名為引出。言引出者。凡有五位。一能出闡提位。二能出外道位。三出声聞位。四出独覚位。五出菩薩無明住地位。(同前・808b-c)

ところで、前のA『勝鬘宝窟』中には、「如来蔵、煩悩の中に在るを如来蔵と名づく。如来蔵とは即ち是れ仏性なり」という記述があるが、かかる立場は、例えば『法華論疏』や『涅槃経遊意』にも次のようにあるように、吉蔵に一貫したものであった。

B.『法華論疏』巻上

言実相者謂如来蔵法身之体不変義故如来蔵者。在煩悩之内名如来蔵。亦名如来胎。法身之体不変義故者。雖在煩悩不為煩悩所染。故名不変。(大正蔵40.806a)

C.『涅槃経遊意』

隠而不説亦名如来蔵。今教顕一切衆生皆有仏性。仏性是我義。衆生依方等大教臨度断除顛倒。則顕如来蔵。蔵顕則名法身。顕衆生有仏性。則顕衆生是仏性根本。衆生是仏故有仏性。非仏則不得有仏性。(大正蔵38.231b)

ともかく、以上からA『勝鬘宝窟』の記述が概ね『仏性論』をそのまま下敷きとしてなされたものであることが理解されたであろう。また、記述後半では「仏性に三有り」として「自性住仏性」「引出仏性」「至得仏性」の「三仏性」の名があげられているが、「三仏性」について、吉蔵は記述末尾において「諸仏の三身、即ち是れ至得仏性なり。以前の二を本と

為す」といっている点が注意される。したがって、吉蔵自らがそのように語っている以上、吉蔵においては「自性住仏性」「引出仏性」がより重要なものであったことが推知されるのである。

ところで、この「自性住」「引出」「至得」の「三仏性」は、前に原文を示しておいた②『仏性論』巻第2「三因品」では、記述後半の下線を付した部分に明らかなように、「応得因」を開いたものであるとされていたことがわかる。

吉蔵が「仏性に三有り」として、このように「自性住仏性」「引出仏性」「至得仏性」のいわゆる「三仏性」を立てることは、A『勝鬘宝窟』以外にも例えば次のように認めることができる。

D.『勝鬘宝窟』巻下之末

是故如来蔵是依是持是建立也。結也。以体是無為常住。故能為衆生作依持建立。是所依処名依。持者連持令不断絶。建立者始終令得成仏。三**蔵師意**。依者即自性住仏性。不従縁有。名為自性体是常法。故名為住。以是常住。為生死作依也。持者即引出仏性。由有仏性。故得修行顕出本有之法。故名為持。建立者即至得果性。以有仏性。故成果徳。名為建立。(大正蔵37.83a)

E.『十二門論疏』巻上「観因縁品」

根本門第三

問。万行為因乗。衆徳為果乗。此論但明空義。云何釈大乗耶。

答。此論明於乗本。乗本若成乗義則立。言乗本者所謂諸法実相。契斯実相則発生般若。由般若故導成万行。皆無所得能動能出。故名為乗。又今明実相則具万徳。対虚妄故名之為実。用之為身目為法身。諸仏以此為性称為仏性。遠離二辺名為中道。照無不浄目為般若。累無不寂称為涅槃。故但明実相即万義皆円。

問。云何悟此実相。

答。以十二種門通於実相。令諸衆生従一一門得悟実相。又乗有三種。一乗因。二乗縁。三乗果。乗因者所謂実相。乗縁者即是万行。乗果者謂如来法身。

問。何故但明此三。

答。由実相故万行成。万行成故果徳立。要須辨三。

問。何処有此三文。

答。**摂大乗論明。乗有**三。一者性乗謂真如。二随乗即万行。三得乗謂仏果。此三猶一体。但約時故分三。即是三種仏性義。性乗謂自性住仏性。随乗謂引出仏性。修於万行引出因中仏性。三果乗則果徳仏性。此三仏性釈涅槃経甚精。是故涅槃経。或時明仏性是果。或時明是因。或明仏性是空。此論正釈於空。則是釈根本仏性。故**涅槃云**。仏性者名為一乗。今既釈一乗即釈仏性。

問。三論但明空義。正可釈於大品。云何解仏性一乗。

答。三論通申大小二教。則大乗之義悉在其中。豈不明一乗仏性。

問。何処有明一乗仏性文耶。

答。**中論四諦品云**。世尊知是法甚深微妙相非鈍根所及。是故不欲説。此即法華之文。法華還序初成道時華厳之事。明知華厳法華顕在中論之内。**又偈云**。雖復懃精進修行菩提道。若先非仏性終不得成仏。**長行釈云**。如鉄無金性。雖復鍛錬終不得成金。即仏性文也。観如来品明法身絶四句超百非。与涅槃経金剛身品更無有異。即法身文也。（大正蔵 42.136c-137a）

F.『法華論疏』巻中

如来依彼三種平等説一乗法故以如来法身与彼声聞法身平等無異故故与授記。難意云。声聞若不成仏云何虚妄為之受記。是故先釈云。以如来法身与声聞法身平等無異故与受記。非是虚妄。

問。前云得決定心故与受記。後明依仏性平等故与受記。此二何異。

答。前是縁因後是正因。又前是引出仏性。後是自性住仏性。所以為異非是具足修行功徳者。第二双非結酬前両難也。（大正蔵 40.818b）

まずD『勝鬘宝窟』は、経の「自性清浄章」にいう「是故如来蔵。是依是持是建立」（大正蔵 12.222b）を注釈した部分であるが、ここで吉蔵は「依」を「自性住仏性」に、「持」を「引出仏性」に、「建立」を「至得果（仏）性」に当てている。

次にF『法華論疏』を見ると、記述後半に下線を付した箇所に明らかなように、ここでは「自性住仏性」が「正因仏性」に、「引出仏性」が「縁因仏性」とされていることがわかる。吉蔵の仏性理解の基本が『涅槃経』に基づく「正因」「縁因」の二種仏性にあったことは周知のとおりであるが[(9)]、かかる事実を勘案すれば、前に吉蔵がA『勝鬘宝窟』において「諸

仏の三身、即ち是れ至得仏性なり。以前の二を本と為す」と述べていたのは、こうした事情を反映したものであったといえよう。

最後にE『十二門論疏』「根本門」の記述は、筆者が「自性住」「引出」「至得」のいわゆる「三仏性」を見る上で最も重要であると思う記述である[10]。まず、このE『十二門論疏』において吉蔵は「乗には三種が有る」として、これを次のように対配している。

ア.「乗因」—「実相」
イ.「乗縁」—「万行」
ウ.「乗果」—「如来法身」

続けて、どうしてこの三を明かすのかと問われて、吉蔵は「実相に由るが故に万行成じ、万行成ずるが故に果徳立つ」と答えていることがわかる。したがって、これを図示すれば、

「実相」→「万行」→「果徳」

という図式が導かれよう。さらに、吉蔵は『摂大乗論』を引証して[11]、これを次のように対配している[12]。

ア.「性乗」—「真如」—「自性住仏性」
イ.「随乗」—「万行」—「引出仏性」
ウ.「得乗」—「仏果」—「果徳仏性」

ここでは前の「至得仏性」が「果徳仏性」となっているが、その意味に大きな相違はないであろう。また、この「三仏性」について、吉蔵が「猶お一体なるも、但だ時に約するが故に三を分かつ」とし、さらに「此の三仏性は涅槃経を釈して甚だ精(あき)らかなり」と述べている点は重要である。なぜなら、吉蔵が依拠した『仏性論』の原文②には、次のようにあったからである。煩を厭わず再度これを提示すれば、次のとおりである。

②『仏性論』巻第2「三因品第一」

復次仏性体有三種。三性所摂義応知。三種者。所謂三因三種仏性。三因者。一応得因。二加行因。三円満因。**応得因者**。二空所現真如。由此空故。応得菩提心。及加行等。乃至道後法身。故称応得。加行因者。謂菩提心。

由此心故。能得三十七品。十地十波羅蜜。助道之法。乃至道後法身。是名加行因。**円満因者**。即是加行。由加行故。得因円満。及果円満。因円満者。謂福慧行。果円満者。謂智断恩徳。此三因前一則以無為如理為体。後二則以有為願行為体。三種仏性者。応得因中具有三性。一住自性性。二引出性。三至得性。記曰。住自性者。謂道前凡夫位。引出性者。從発心以上。窮有学聖位。至得性者。無学聖位。(大正蔵 31.794a)

すでに述べたように記述後半の下線部分から、まず「住自性性」(13)「引出」「至得」の「三仏性」は、「応得因」を開いたものであり、「応得因」中に具有されたものであることが理解される。さらにこの「応得因」とは、「二空所顕の真如をいい、此の空に由るが故に応に菩提心と及び加行等と乃至道後の法身とを得」ることができるので、「応得」と称されていることが知られる。

すなわち、これは「真如」→「菩提心」→「法身」という図式によって、「仏果」を得ることができるという主張であろう(14)。そして、この図式はすでに見たE『十二門論疏』の「実相」→「万行」→「果徳」という図式と見事に一致するものである(15)。

さて、『法華玄論』巻第4には、上記の議論に関連した次のような記述があって、吉蔵の立場はより明瞭になる。

G.『法華玄論』巻第4

次中辺分別論明乗有五。一乗本謂真如仏性。二乗行即福慧等。三乗摂謂慈悲心。引一切衆生悉共出生死。四乗障謂煩悩障及智障。三界内煩悩名煩悩障。餘障一切行解名為智障。五者乗果即仏果也。

唯識論解乗有三体六義。三体同前。一自性二空所顕真如是也。二随流随順自性流。福慧十地等法是也。三至果即随流所出無上菩提。及一切不共法也。六義者一体是如如空出離四謗。二者因謂福慧三者摂摂一切衆生四境界了真俗修二諦。五障即皮肉心三障。六果謂無上菩提。此六義次第者正以真如為根本。以有如此故起福慧二行。起福慧二行故能摂一切衆生。摂一切衆生由照真俗。迷境故成惑。則失乗理。見境故能除惑。除惑故得仏果也。

問。乗是何義。

答。**彼論釈云**。乗是顕載義。由真如仏性故出福慧等行。由福慧等行故出仏果。仏果載出衆生。**摂大乗論有**三。謂乗因乗縁乗得。乗因者謂真如仏性。

第一義空為乗因。乗縁謂万行。乗得即仏果也。

問。真如仏性云何為乗体也。

答。唯有真如仏性為真実。修万行為欲顕此仏性。仏性顕故名為法身。此三要相須。以仏性是本故名為因。雖有因復須縁因。因縁具故得果。今不違此説也。

法華論亦明三種。一乗体。謂如来平等法身。即是仏性為乗体。又云仏乗者謂如来大般涅槃。此即明仏果為乗体。此隠顕為異実無両也。又釈汝等所行是菩薩道。及低頭挙手之善発菩提心修菩薩行。即是了因乃為乗縁也。此猶是三種仏性義耳。乗縁謂引出仏性即了因也。乗体謂因仏性。乗果謂果仏性。不説果果性者。果果性還属果門。不説境界性者属因門又広説有五。略即唯三也。

又望于十二門論乗具四事。一者乗本。謂諸法実相。由実相生波若故実相為本。即是乗境義。二者乗主。由波若故万行得成故波若為主。即智慧。三者乗助。除波若外餘一切行資成波若。四者乗果乗此乗故得薩婆若也。

又此経明乗有三事。一車二牛三賓従。車通因果万徳万行。牛亦通因果。中道正観離断常之垢為白。由此観故引万行出生死如牛。此即波若導衆行義也。(大正蔵 34.390c-391a)

ここで、吉蔵はまず冒頭において、「中辺分別論に乗に五有り」「唯識論に乗を解するに三体六義有り」として、これを次のように対配している。

『中辺分別論』—「乗に五有り」

ア.「乗本」—「真如仏性」

イ.「乗慧」—「福慧等」

ウ.「乗摂」—「慈悲心」

エ.「乗障」—「煩悩障・智障」

オ.「乗果」—「仏果」

『唯識論』—「乗を解するに三体六義有り」

「三体」

ア.「自性」—「真如」

イ.「随流」—「福慧十地等法」

ウ.「至果」—「無上菩提」

「六義」

ア.「体」―「如如空」（出離四謗）

イ.「因」―「福慧」

ウ.「摂」―「摂一切衆生」

エ.「境界」―「了真俗修二諦」

オ.「障」―「皮肉心三障」

カ.「果」―「無上菩提」

ここにいう『中辺分別論』と『唯識論』に関しては、すでに平井俊榮博士が、現在の筆者の問題意識とはまったく別な関心からその記述に着目され[16]、吉蔵の引く『中辺分別論』の文は現行の蔵経には見られない文であり、『唯識論』も「現存する『大乗唯識論』や、その他の唯識関係のいずれの論書にも該当しないもので、現在欠本となっている真諦の著作と考えられる」[17]ものであることを指摘している。その上で、博士は前記『中辺分別論』の引用については、吉蔵は次の真諦訳『摂大乗論釈』（世親釈）から引用したものであろうと述べている。すなわち、『摂大乗論釈』には、次のようにある。

④世親釈真諦訳『摂大乗論釈』巻第 15

論曰。五救済乗為業。諸菩薩欲偏行別乗。及未定根性声聞。能安立彼為修行大乗故釈曰。此明真実教力。乗有人法。人有大乗人有小乗人。法有方便乗法有正乗法。転方便乗修治正乗故。名救済乗。摩訶般若経説。乗有三義。一性義二行義三果義。二空所顕三無性。真如名性。由此性修十度十地名行。由修此行。究竟証得常楽我浄四徳名果。又中辺論説乗有五義。一出離為体謂真如。二福慧為因能引出故。三衆生為摂。如根性摂令至果故。四無上菩提為果。行究竟至此果故。五三惑為障。除此三惑。前四義成故。諸菩薩在十信位中。修大行未堅固。多厭怖生死。慈悲衆生心猶劣薄。喜欲捨大乗本願修小乗道。故言欲偏行別乗。小乗説声聞。若得信等五根不名定根以未得聖故。若得未知欲知等三根則名定根。以得聖故。若至頂位不名定性。以不免四悪道故。若至忍位名為定性。以免四悪道故。若依小乗解。未得定根性。則可転小為大。若得定根性則不可転。如此声聞。無有改小為大義。云何得説一乗。今依大乗解。未専修菩薩道。悉名未定根性故。一切声聞皆

有可転為大義。安立如此大小乗人。令修行大乗。（大正蔵 31.264c-265a）

平井博士ご指摘のように、吉蔵が『摂大乗論釈』のこの部分を、G『法華玄論』巻第４の下敷きとしていることは疑いようのない事実である。『法華玄論』にいう「摂大乗論有三。謂乗因乗縁乗得」という記述が『摂大乗論』本文には見当たらず、④『摂大乗論釈』の「摩訶般若経説」以下の文に類似していることも平井博士の指摘の正しさを裏書きするものといえよう[18]。ところで、この『摂大乗論釈』の一連の文脈は、文中に「一切声聞皆有可転為大義」とあるように、一切の声聞の「転根」を認めている箇所であるということに注意しておきたい[19]。この点については、後述の〔三〕において再びふれよう。

ともかく、上記のような背景を有する『法華玄論』巻第４の『中辺分別論』と『唯識論』の「乗」に関する見解を総括して、吉蔵は、

> 此の六義の次第は、正しく真如を以て根本と為す。此の如有るを以ての故に福慧の二行を起こす。福慧の二行を起こすが故に一切衆生を摂す。一切衆生を摂することは、真俗を照らすに由ってなり。境に迷うが故に惑を成ず。則ち乗の理を失す。境を見るが故に能く惑を除く。惑を除くが故に仏果を得るなり。

といっている。すなわち、述べられている内容は、前に見た『仏性論』に基づく理解とまったく同等のものと理解されるのである。G『法華玄論』では、これに続いて『摂大乗論』[20]、『法華論』[21]、『十二門論』[22]、『法華経』[23]が引用されて議論が進められているが、吉蔵の主張は上記以上の域を出るものではない。この中、『十二門論』の引用部分に関しては、前のE『十二門論疏』の記述がこれに呼応しよう。

以上によって、吉蔵が真諦訳『仏性論』の理解に沿いつつ、その「仏性」に関する議論を進めていたことが確認されたことであろう。

〔２〕

さて次に、先ごろ藤井教公氏は、『法華論疏』の次の一文に注目され、これをもって吉蔵は「一闡提成仏説」に立っていることを主張された[24]。すなわち、藤井氏の注目した『法華論疏』の文とは、次のようなもので

ある。

H.『法華論疏』巻中

依仏性論。為四人［闡提、外道、声聞、独覚］破四障。成四因［信楽大乗、無分別般若、破虚空三昧、菩薩大悲］得四果［常、楽、我、浄］。故不多不少。但明四種。初方便破闡提不信障。令信楽大乗。為成大浄種。（引用文中の括弧とその内容は、藤井氏による）（大正蔵 40.804b）

この『法華論疏』の記述が、A『勝鬘宝窟』後半の記述と同致のものであることは、同じく『仏性論』に依っている事実から推しても明らかなことである。そして、このH『法華論疏』やA『勝鬘宝窟』と同一の文脈は、次に示すように他の吉蔵著作中にもしばしばこれを検出することができる。

I.『中観論疏』巻第2末

次明以四法為四人治四障。一者信楽大乗為闡提人破背大乗障。二以無分別般若治外道執我一異障。以外道執我一異是有所得分別。故今明無分別般若即是無所得般若。次以破虚空三昧破声聞人怖畏生死障。声聞人滅身智住無為虚空中。故今得破虚空三昧破除此障也。四者菩薩修習大悲。為独覚及始行菩薩。破独覚不利益衆生及始行菩薩有仏道可求。破仏有来去障。明菩薩修習大悲自利利人自他不二。此四法即是八不。初信楽大乗謂不生不滅。以悟不生不滅故起信心也。次無分別般若即是不一不異。息一異之心名無分別。次破虚空三昧即是不断不常。既破声聞人住無為空中。即是不常。不断亦無灰身滅智之断。次修習大悲即是不来不去。以菩薩修習大悲自利利人自他不二。知来去無来去無来去来去也。

次明以四法為因。得如来四徳之果。以信楽大乗為因。破於闡提不信得於浄果。果即不生不滅也。次行無分別般若為因。破外道一異分別。得如来我徳果。果即非一非異。以非外道一異之我故得於仏我。故此我非一非異也。次以行破虚空三昧為因。破声聞得如来楽果。声聞雖言住無為楽此於大乗是生死苦。今破断常得不断不常究竟楽果也。次修習大悲為因。破独覚自為及始行謂仏有去来。明菩薩常行大悲。窮生死際以建此因故。得如来常住之果。**真諦三蔵用無上依経摂大乗論意**。釈八不甚広。今略取大意耳。初為各四人。次破四障。次行四因。後得四果。八不之要義顕於斯。与上諸解釈無相違背

也。（大正蔵 42.33c-34a）

J.『涅槃経遊意』

四徳対四倒故明四行四徳也。又対四人明四因四徳。四人者則闡提外道声聞縁覚也。四因者謂信心般若虚空三昧大悲。破闡提不信明信。信故得浄徳也。般若対外道。外道著我人一異。般若正慧破一異我心故明般若。故得真我徳。虚空三昧破声聞厭苦無常。在可厭故得三昧。三昧故得楽徳也。大悲対縁覚。縁覚著無常果永入滅。無大悲故。大悲破無常得常徳也。為対四人明四因。故釈四徳也。（大正蔵 38.237b）

K.『勝鬘宝窟』巻下之末

問。仏徳無量。何故偏挙四耶。

答。仏徳雖衆。蓋乃且拠一門為言耳。於中略以七義釈之。（中略）

五対治闡提等四種過故。果徳仏説常楽我浄。**如宝性論説**。一闡提謗法。対治彼故。説仏真浄。二外道著我。対治彼故。説仏真我。三声聞畏苦。対治彼故。説仏真楽。四辟支捨心。捨諸衆生。対治彼故。説仏真常。

六酬因不同。故立四種。言四因者。**如宝性論**。一者信心。除闡提謗法得仏真浄。二者波若。除外道著我得仏真我。三者三昧。以空三昧除声聞畏苦得仏真楽。四者大悲。常随衆生除辟支捨心得仏真常。以斯四義。故立四種也。（大正蔵 37.78a-b）

この中、K『勝鬘宝窟』の記述については、同じく藤井氏により、これまで散佚したと思われていた慧遠（523-592）の『勝鬘義記』下巻が公表され[25]、さらに吉蔵の『宝窟』との細かな本文対照が示されたことにより[26]、この部分は慧遠の『義記』を孫引いていることが明らかとなった。この部分に限らず、『宝窟』には比較的多くの『宝性論』の引用関説が認められるが、その主要部分はそのほとんどが慧遠疏をそのまま引き写したものとなっている[27]。もちろん、慧遠疏と対応しない部分にも『宝性論』に対する引用関説が見られるから[28]、吉蔵が『宝性論』を知らなかったということにはならないが、逆に『宝性論』ではなくて真諦訳の『仏性論』を多用したところに吉蔵の一つの特徴があったとはいえるであろう。なお、『宝性論』と同様、『宝窟』における『起信論』の引用箇所の多くが慧遠疏に負っていることを指摘した論文に吉津宜英博士の成果があるので参照されたい[29]。

それはともかく、Iの『中観論疏』の記述は、その前文に「余至関内。得三蔵師用無上依経意釈八不。今略述之。八不為四人説。亦得為八人説。為四人説者為闡提説不生不滅中道」（大正蔵 42.33a）とあることからも明らかなように、『無上依経』を意識してなされたものであることがわかる。したがって、吉蔵は本文中に示した一連の文脈を、『無上依経』や『仏性論』『宝性論』に依って論述していたということになる。

上記より、筆者はA『勝鬘宝窟』の記述、藤井氏が指摘されたH『法華論疏』の記述、そしていま筆者が示したI・J・Kの一連の記述は、藤井氏ご指摘のように吉蔵に「一闡提成仏」を認めていた証左であったと理解する。そして、そのすべてに真諦三蔵が関わっていることはたんなる偶然とはいえないであろう[30]。

〔3〕

最後に、『法華遊意』には顕わに一乗を説くのは何人のためであるのかと問う、次のような記述がある[31]。

L.『法華遊意』

問。顕説一乗為何人耶。

答。為三種人。一者為不定根性声聞令入一乗。二者為練已定根性声聞令入一乗。三者為直往菩薩令知有一無三。但進不退也。（大正蔵 34.646c）

そして、この箇所は『法華玄論』の次の記述より、真諦訳『摂大乗論』に基づいてなされたものであることは明らかである。

M.『法華玄論』巻第5

問。不発餘人迹云何皆是権行。

答。**摂大乗論云**。身子等得受記者。是化人為欲引未定声聞。直趣仏道。已定之者令其練根。

問。云何名定未定声聞。

答。小乗義忍法之前三乗未定。忍法則定也。（大正蔵 34.401c）

N.『法華玄論』巻第7

問。身子皆是退大取小人。故云三万億仏所修学大乗。則知先為退大取小人也。

答。身子是権行人。為引発軫学小実行之人故先対身子也。**如摂大乗論云**。身子化人既得授記。令未定入二乗正位者改小乗行。已入正位者令其練根学菩薩道也。（大正蔵 34.423a）

しかし、現行の真諦訳『摂大乗論』には、吉蔵の引くような文章は見当たらず、吉蔵が踏まえたのはすでに見た同じく真諦訳の『摂大乗論釈』（世親釈）の次の記述であったものと思われる。

⑤真諦訳『摂大乗論釈』（世親釈）巻第 15

復次。於法華大集中。有諸菩薩。名同舎利弗等。此菩薩得此意。仏為授記。故説一乗。復次。仏化作舎利弗等声聞。為其授記。欲令已定根性声聞更練根為菩薩。未定根性声聞令直修仏道。由仏道般涅槃。（大正蔵 31.266a）

内容から見て、L『法華遊意』が⑤真諦訳『摂大乗論釈』を踏まえていることは明らかなことであろう[32]。問題としているL『法華遊意』では、顕わに一乗を説くのは何人のためであるのかという問いに対して、吉蔵は「不定根性の声聞」「已定根性の声聞」「直往の菩薩」のためであると答えているのであるから、吉蔵においては「直往の菩薩」「不定根性の声聞」のみならず「已定根性の声聞」も「根を練ること（練根）」によって成仏への道が開かれていたということになるであろう。すなわち、これらから筆者は、吉蔵は声聞の「転根」を認め、いわゆる「一切皆成説」に立脚していたと考えるのである[33]。

三

以上、本稿では吉蔵が、

〔一〕吉蔵における仏性理解が真諦訳『仏性論』に基づいていること。

〔二〕同論に基づいて吉蔵が「一闡提成仏説」を認めていたこと。

〔三〕吉蔵が真諦訳『摂大乗論釈』の所説を受けて「転根」の義を認めていたこと。

の 3 点を論じた。「諸大乗経顕道無異」を標榜し、多彩な経論、学説を引用する吉蔵にあっては、特定のどの経典や学説あるいは人物が決定的に影響を与えたと言い切ることはきわめて難しいことであるが、本稿において

確認したように、吉蔵の仏性理解、声聞成仏思想には真諦三蔵が大きく関わっていたことは理解していただけたであろう。

注

⑴　小菅陽子「吉蔵『仁王経疏』について―釈二諦品・「三種仏性説」を中心に―」（『印度学仏教学研究』第 54 号第 2 号、2006 年）

⑵　中西久味「吉蔵における眞諦説引用をめぐって―その一試論」（船山徹編『眞諦三藏研究論集』京都大学人文科学研究所、2012 年）

⑶　『東アジア仏教学術論集』第 1 号（2013 年）参照。

⑷　拙著『仏性思想の展開―吉蔵を中心とした『法華論』受容史』（大蔵出版、2002 年）第一篇第四章参照。

⑸　小菅論文は従来取り上げられることのなかった『仁王般若経疏』の「三種仏性説」に着目して論述しているところに特徴があり、中西論文は吉蔵が関説する真諦に関する記事を細大漏らさず拾い上げていて有益である。ただ、両論文とも吉蔵の仏性説に関する見解としてはそれほどの新鮮味は見られないように思う。また、両氏の論文においては、残念ながら筆者の旧稿は取り上げていただけなかったので、そのような意味からもあえて本稿を草することにした。

⑹　務台孝尚「吉蔵の教学と眞諦三蔵」（『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』第 18 号、1985 年）。この論文の中で務台氏は、吉蔵著作中に見られる真諦三蔵諸訳経論の引用状況の概略を示し、あわせて頻出引用箇所を摘出している。

⑺　『仏性論』の文献的問題については、高崎直道「仏性論解題」（新国訳大蔵経・論集部二『仏性論・大乗起信論（旧・新二訳）』（大蔵出版、2005 年）参照。この解題において、高崎博士は「真諦三蔵は『宝性論』を知悉していたのみでなく、『仏性論』さらに『無上依経』も真諦その人が著わしたのではないか」（p64）としている。おそらく、これを受けて中西氏は「現在では眞諦の著述と見なされている『佛性論』」と述べている（前掲中西論文、p252）。

⑻　『勝鬘宝窟』の原文は、大正蔵経の脚注によって改めている箇所がある。

⑼　前注（4）拙著 p194-204 参照。

⑽　この『十二門論疏』の記述については、崔教授も検討を加えている。

⑾　『摂大乗論』本文には、吉蔵のいうような引文は見当たらない。真諦訳『摂大乗論釈』（世親釈）巻第 15 に「論曰。五救済乗為業。諸菩薩欲偏行別乗。及未定根性声聞。能安立彼為修行大乗故釈曰。此明真実教力。乗有人法。人有大乗人有小乗人。法有方便乗法有正乗法。転方便乗修治正乗故。名救

済乗。摩訶般若経説。乗有三義。一性義二行義三果義（以下略）」（大正蔵 31.264c）とあるを参照。なお、この点については、平井俊榮『法華文句の成立に関する研究』第一篇第三章「『法華玄義』と『法華玄論』」（春秋社、1985 年、p132-133）参照。

⑿ 吉蔵がその著書中、『摂大乗論』に依ってしばしば「乗に三義有り」と述べていることついては、前注（6）務台論文がこれを指摘している。さらに氏はこの論文の中で、吉蔵が「乗の三義」として関説する箇所を概括的に整理している。いま本文で示した『十二門論疏』の例を除いて、務台論文が指示している箇所を示せば、次のとおりである。

① 『法華玄論』巻第 3「摂大乗論引波若云。乗有三種因乗縁乗果乗。果乗者謂常楽我浄」（大正蔵 34.383a）

② 『法華玄論』巻第 4「摂大乗論有三。謂乗因乗縁乗得。乗因者謂真如仏性。第一義空為乗因。乗縁謂万行。乗得即仏果也」（大正蔵 34.390c）

③ 『法華論疏』巻中「云何以平等法身為一乗体。答。乗有三種。一性乗。二随乗。三乗得。性乗即是真如法身。要由有真如法身。然後修於万行称曰乗随。証得仏果名為乗得」（大正蔵 40.813a）

④ 『大乗玄論』巻第 3「一乗体者。正法中道為体。摂論云。性乗行乗果乗」（大正蔵 45.42b）

ただし、現在の筆者は『大乗玄論』については吉蔵の撰述を疑っている。この点については、拙稿「『大乗玄論』に関する諸問題―「一乗義」を中心として」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第 70 号、2012 年）を参照されたい。

⒀ 吉蔵は「住自性性」を「自性住仏性」としているが、同義語と判断して問題ないであろう。

⒁ 前注（7）の「解題」において、高崎博士は次のように述べる。「当論独自の説としていささか説明を要するのが、「三因品」である。ここで三因とは「応得因」「加行因」「円満因」で、順次「二空所顕の真如」「発菩提心」「加行」をさすといわれ、前者が後者の「因」であるとされる。したがって、応得因たる仏性のあることによって、応得の菩提に向けての発心があり、加行があり、そして最後に「円満」すなわち、菩提・仏位の獲得がある。それは福智二資糧という加行の円満と、仏に具わる智・断・恩の三徳の円満を内容とするという。しかし根元的には、仏性が獲得されるべき仏・菩提の因であるのは、それが真如にほかならないからだ、というのがこの三因の論理である」（p32、下線部＝奥野）。

⒂ こうした図式を筆者は旧稿では「流れ」と呼び、後世の言葉でいえば「真如随縁的理解」ではないかと述べた。当然のことながら、「真如随縁」とい

う言葉は華厳の法蔵（643-712）に由来するものである。それゆえ、筆者も「後世の言葉でいえば」と断っておいたのであるが、筆者が「真如随縁」という言葉を使ったのには、多分に次のような塩田義遜博士の『仏性論』の解説の影響があった。すなわち、塩田博士はその著『法華教学史の研究』第一編第三章「世親の法華経観」（1960 年、地方書院）の中で、まず『仏性論』の「三因」について、「仏性論第二の三因品には応得・加行・円満の三因を立て、先に所謂二空所顕の真如仏性を応得因となし、菩提心を以て加行因とし、円満因とは三十七品中波羅蜜等の加行に依り、福慧智断の因を円成する因となし、応得因は無為の真如を体とし、後の二因は有為の願行を体とすと説き、此の三因に依り自住・引出・至得の三仏性を説き、住自性仏性は道前の凡夫位、引出仏性は発心以上の学位、至得仏性は無学の聖位」（p76）と解説され、さらに「かくの如く如来蔵即ち真如頼耶の上に如々境の理念のみならず、勝鬘経等に依って如々智に依る応得の作用即ち真如随縁の義を認めたことは、二空所顕の真如を応得仏性と説いたのが、これ世親の仏性論の特長というべきである。かく世親は二空所顕の真如を以て応得菩提心の仏性と為し、その仏性に更に引出、至得の二因を加えて所謂三因仏性説を為したることは、仏性ある故に菩提心起り、菩提心あるが故に修証の仏果を期すべき後世天台の三因仏性説の根拠といふべきである」（p77、下線部＝奥野）と述べられている。なお、武邑尚邦『仏性論研究』（百華苑、1977 年、p215-218）も合わせて参照のこと。ただし、現在は「真如随縁」の定義に関し、少し慎重であるべきであると考えるにいたったので、旧稿中の「真如随縁的理解」という文言はいまは保留しておきたい。

⑯ 前注（11）平井書 第一篇第三章「『法華玄義』と『法華玄論』」を参照。

⑰ 前注（11）平井書 p132 参照。

⑱ 平井博士は、吉蔵は同一の文脈である『大乗玄論』巻第三「一乗義」では「摂論云。性乗行乗果乗」（大正蔵 45.42b）と引用していることを指摘し、この事実から推して『法華玄論』の「乗因・乗縁・乗得」の三義は『摂論釈』の三義をアレンジしたものであろうと述べている。前注（11）『法華文句の成立に関する研究』（p132）参照。また、前注（6）の務台論文もあわせて参照のこと。

⑲ この『摂大乗論釈』に関して、勝呂信静博士は、「右は小乗仏教では忍位以上では根性が定まったものとして声聞の転根を認めないが、大乗では一切の声聞を不定性として転根・成仏を認めるという趣旨である。真諦訳の思想は、定性・不定性の区別を越えて一切の声聞（あるいは一切の衆生）の性質を不定性と見ることにあるようであって、これは三乗各別説・五姓各別説の否定に連なる思想である」（『初期唯識思想の研究』春秋社、1989 年、第二篇第三章、p483 注（74）、下線部＝奥野）と述べている。

⑳ 『摂大乗論』原文にはない。世親釈真諦訳『摂大乗論釈』巻第 15（大正蔵 31.264c）参照。なお、この『摂大乗論』の引用に関しては、前注（11）平井書を参照のこと。

㉑ 『妙法蓮華経憂波提舎』巻下（大正蔵 26.7c-8a）参照。

㉒ 『十二門論』の原文には相当する文はない。『十二門論』に基づいて吉蔵が創作したものと考えられる。この点については、前注（11）平井書 p134-135 参照。

㉓ 『妙法蓮華経』巻第 2「譬喩品」に「有大白牛。肥壮多力。形体姝好。以駕宝車。多諸儐従。而侍衛之。以是妙車。等賜諸子」（大正蔵 9.14c）とあるのを参照。

㉔ 研究代表者・藤井教公『大乗『涅槃経』を中心とした仏教の平等思想と差別思想の起源と変遷の研究』（平成 9 年度～平成 11 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書、2001 年）に収められた藤井氏の英文論文、Kyoko Fujii “Transition of the Concept of Icchantika in East Asian Buddhism” を参照。この中で藤井氏は、次のように述べる。

> The meaning of the sentence is that the icchantika have an obstacle of non-belief. In other words, since they slander the Mahāyāna sutras, they necessarily lack faith in it. But, through appropriate measures(upāya), this obstacle will be removed from the icchantika, and the seed of faith in Mahāyāna will sprout within them.（p80）

これによって、氏が吉蔵に「一闡提成仏説」を認めていたことは明らかであろう。

㉕ 散逸してしまったと思われていた『勝鬘義記』下巻は、藤井教公氏の校訂により『新纂大日本続蔵経』第 19 巻に収録された。

㉖ 藤井教公「浄影寺慧遠撰『勝鬘義記』巻下と吉蔵『勝鬘宝窟』との比較対照」（『常葉学園浜松大学研究論集』第 2 号、1990 年）参照。

㉗ この点については、拙稿「吉蔵撰『勝鬘宝窟』をめぐって」（『奥田聖応博士古稀記念論集』近刊）を参照されたい。

㉘ 『勝鬘宝窟』において『宝性論』の引用が集中的に見られるのは、大正蔵 37.・78a から c であるが、他に 45b、54b、70a、76c にも引用が見られる。しかし、これからの部分は『義記』には対応箇所がない。また、吉蔵著書中における『宝性論』の引用は、筆者が確認している限り『宝窟』以外では、『法華遊意』に「五者宝性論云。究竟一乗経説有如来蔵及三宝無差別」（大正蔵 34.642b）とあるだけである。641b にも「宝性論」の名が見られるが、前文に「相伝云」とあるので吉蔵の直接の引用とは見なせないであろう。

㉙ 吉津宜英「吉蔵の大乗起信論引用について」（『印度学仏教学研究』第 50 巻

第 1 号、2001 年)。なお、筆者は吉蔵は『宝性論』同様、『起信論』の存在は知っていたと考えている。この点については、前注（27）の拙稿を参照されたい。ただし、真諦訳と認識していたかどうかはわからない。

(30) 真諦のいう「闡提」については、『法華義疏』巻第 7 に「**真諦三蔵云**。闡提有二。一者凡夫。二者二乗。凡夫闡提不信三一。二乗闡提信三不信一」（大正蔵 34.543b）とあるを参照。この一文の解釈をめぐっては、前注（4）拙著第一篇第三章「吉蔵の声聞成仏思想」を参照されたい。

(31) 『法華遊意』に類似した記述は、次のように『勝鬘宝窟』にも見ることができる。巻中本に「問。顕説一乗為何等人。答。通為声聞菩薩二人。言為菩薩者。有二種菩薩。一者昔三乗中菩薩。其人雖学大乗。既聞説三乗。則心猶進退。或謂進成菩薩。或可退作声聞。是故為説有一無二。無二故無退。有一故唯進。為此菩薩故説一乗。二者一乗根性菩薩。過去聞一乗教。故有一乗種子。今世還為演説一乗也。前是三乗菩薩。後是一乗菩薩。言為声聞説一乗者亦有二人。法華之前。以大乗法密化。陶練其心。至法華経方得説一。故法華云。仏昔於菩薩前。毀呰声聞楽小法者。然仏実以大乗教化。即是証密説一乗事也。二者有未定根性声聞。可得転小成大。**如小乗義云**。従初方便至煖頂已来。根猶未定。可得迴転。故得為説一。至増上忍時。餘二乗根性。皆非数縁滅。不可迴転。故不為説一乗也。（大正蔵 37.41c）とあるのを参照。

(32) この世親釈の一文の思想的立場について、勝呂信静博士は、次のように述べる。

「ところで、真諦訳『摂大乗論釈』のこの箇所はいささか他訳と異っていて、定性菩薩に一乗を説くという一項を加え（中略）声聞成仏の趣旨をはっきりさせている。第二は、他訳と異ならないが、それにつづいて次の如くいう。

復次、於法華大集中、有諸菩薩、名同舎利弗等。此菩薩得此意、仏為授記、故説一乗。復次、仏化作舎利弗等声聞、為其授記、欲令已定根性声聞更練根為菩薩。未定根性声聞令直修仏道、由仏道般涅槃。（巻第十五、大正蔵 31.265c）

右は他訳の⑧に当る部分と認められるが、法華経の舎利弗等の菩薩であるとし、定性声聞の成仏を認めている。法華経の思想の基本的構造は、如来蔵思想の方向に展開するもので、いわゆる唯識説はこれと対照的な点があると考えられるが、唯識説もその発展の過程において、次第に如来蔵思想の影響をうけ、これが真諦訳に反映していると思われる」（「インドにおける法華経の注釈的解釈」（金倉円照編『法華経の成立と展開』平楽寺書店、1970 年、p391。圏点＝勝呂博士、下線部＝奥野）。

前注（19）も同様であるが、筆者から見てもこの『摂大乗論釈』の一文

は、定性声聞の成仏を認めた一文と理解するのが至当であると思う。

(33) 吉蔵の立場が「一切皆成」なのか「一分不成仏」なのかについて、筆者と末光愛正氏の間に意見の相違がある。この点については、前注（4）の拙著第一篇第三章「吉蔵の声聞成仏思想」および第四章「吉蔵の仏性思想」を参照していただきたい。

（2013 年 4 月 20 日、記）

＊注（5）に記したような理由もあって口頭発表を行ったため、本稿は旧稿をまとめるかたちになっていることを再度お断りしておきたい。この点、読者にご理解を乞う。

（2013 年 11 月 27 日、追記）